

南部町東西町地域振興協議会 ～暮らしを安全安心に、楽しく～



南部町に昭和46年に「米子ニュータウン」として誕生した東西町。市町村合併後の平成19年に設置された地域振興協議会は、ひとつの自治会としても機能しています。会長の黒木美由紀(くろきみゆき)さんに、まちづくりの楽しさやご苦労、今後の抱負などについて伺いました。

東西町の概要

■南部町東西町地域振興協議会 加入世帯:約380世帯 加入率:約90%

■役員 会長、副会長、集落支援員2名(事務局員)、まちづくり部長、人づくり部長、福祉部長、各区長(女性は黒木さんと事務局員)

南部町には7つの地域振興協議会有り、そのうちの一つ東西町地域振興協議会には100世帯程度の区が4つあり、地域振興協議会がまとめるかたちで活動している。

会長になった経緯

自分は、協議会になる前の10年間は東西町地区公民館で主事として勤務していたが、自治会と公民館が一つになり東西町地域振興協議会が設置されるに伴い、協議会事務局の集落支援員として勤務することになった。その後、会長に就任することになるが、会長になった理由は、いつまでも住み続けたいと思えるこの地域を持続するために、長年担ってきた業務を次の協議会に引き継ぐこと、また、様々な課題に対する企画・実施をスピーディに進める必要があったことや、地域に残る男性中心の慣行に課題意識があったことなどが、会長を引受けた理由。

防災を基本とするまちづくり

平成23年3月の東日本大震災発災の翌日には、当時の会長に呼びかけ、防災体制の見直しを提案し、昼間の災害に対しての安否確認協力委員体制づくりを実行した。それがターニングポイントとなり、まちづくりの意識が大きく変わった。ただ楽しい町を作ればいいという考え方から、生活するにはまず安全で安心が一番だという思いになり、防災を基本としたまちづくりを行ってきた。南部町で震度5弱を記録した令和8年1月の地震の際に、住民の皆さんが自主的に動かれたことは避難訓練を毎年定期的に実施してきた成果であり、とてもうれしかった。

山を削り、埋め立ててニュータウンとして造成された土地であるため、今でも雨が續くと土砂災害の心配で眠れないこともある。そんな思いから、住民の皆さんに、住んでいる土地に対する危機意識を持ってもらうとともに「自分の命は自分で守りましょう」と呼びかけるため、ハザードマップのレッ

ドゾーンにお住いの人に「あなたの家はレッドゾーン」という赤い紙を配った。こんなことまでしているのかという葛藤もあったが、命が優先と考えて実施に踏み切った。

<参考>

黒木さんは、令和2年に防災士の資格を取得し、防災訓練の主導や、講演活動などの普及啓発にも貢献し、令和8年3月には認定 NPO 法人日本防災士機構より防災士功労賞を受賞しました。東西町地域振興協議会としては、これまでも防災意識向上のための活動が認められ何度か表彰を受けています。

自治会としての活動状況

- ・見守られる人と、その人自身が見守りをお願いしたい相手をマッチングし、安否確認を実施。また、見守り者自身が無事を知らせられるよう、屋外に出す黄色いタオルを配布。
- ・行事参加やウォーキングに応じてポイントが貯まる独自の仕組みを作っている。貯まったポイントを地域通貨に換えて、また次の行事で使ってもらうことで交流が深まることを目指している。
- ・子ども会でラジオ体操をしなくなったので協議会で始めたところ、子どもと大人が半々、1日100人の参加があり、皆勤賞の表彰式もやっている。
- ・東西町の広報誌 会報「まち」を毎月発行して配布している。事務局が何をどう考えて活動しているかを、地域の皆さんと共有している。

女性役員を増やすには

女性が会議に出席する時などに、男性が「ご飯は作るけん行ってきて」と言う社会にならないと、女性役員を増やすのはまだまだ難しいと思うので、家族の理解が一番大事。東西町にも優秀な人がたくさんいらっしゃるの、百人以上集まる東西町の全員総会の議長など、どんどん女性を登用するようにしている。

例えば、「女性だったらこうしたほうが使いやすい」などは、自分が女性なので分かるから、協議会ももうちょっと女性が多くなったほうが、自分はいいと思う。

今後の抱負

一番の課題として考えているのは、高齢者の買物や通院のための共助交通。車や保険などのほか、継続できる仕組みづくりをしてなんとか実現させたい。

企画が大好きで、アイデアは湧いてくる。住んでる皆さんのためだけでなく、1回1回が自分のためにもなっている。自分が住んでいるこの町を自分自身でデザインし、提案をして、皆さんに納得していただいて、実行できるというのは最高だと思う。誰かにつなげていきながら町に貢献していきたい。

事務所によく遊びに来ていた小学生たちが中・高校生になり、今、イベントなどで集まって一緒に遊んでいる。東西町は楽しかったという思い出があればいつか帰ってくるかもしれない。そういう思いでいる。